

# シニアの北京見聞録 3 日間



## 中国訪問に至るこれまでのいきさつ

世界文学紀行の続きとして以前から『三国志』の舞台を訪ねたいと思っていた。ところが、近年は日中関係があまりよい状態ではなく、また『三国志』といえば、当時の魏・呉・蜀の国を考えると舞台はほぼ中国全土に及びやたらに広い。そこで映画「レッド・クリフ」のメイン舞台・赤壁に焦点を絞って、と考えたこともあった。高校時代に漢文の授業で暗記させられた「赤壁の譜」の舞台に浸ってみたいとの願望もあった。

そんななか、ある旅行社が企画する「北京感謝祭 3 日間」を目にした。驚くほど格安ながら四つの世界遺産を訪ねるといふ。昨年 11 月には同じ企画の「インド 5 日間」もよく充実していたことからすぐに申し込んだ。

一方で、この機会に文学紀行は一区切りとして、仏教伝来のルートとなった三国（インド・中国・韓国）を訪ねてみたいといった思いもあった。実際に仏教が伝播したルートそのものではないが、少なくともその国の大地を踏むことで、その意義に代えたい、との“手抜き”もあったのだ。

10 月 14 日午前 7 時 20 分、元の職場の友人と中国国際航空（CA）422 便で北京へと飛び立った。

## 万里の長城：女坂でもシニアにはフーフー



午前 10 時過ぎに北京空港に到着すると（日本より 1 時間遅れの時差がある）途中で昼食（飲茶料理）を済ませ、そのまま万里の長城に直行した。一行のバスは比較的登りやすく人気の高い八達嶺の登り口に駐車した。外気は摂氏 10 度。北京市内に比べてやや寒い。

北京市の北部を東から西へ龍のごとく横たわる世界文化遺産。ガイドの説明では全長 6000 キロ。シリーズ『地球の歩き方』（北京編）によれば全長約 2 万 1200 キロとある。枝葉的な道も含むのだろう。よく人工衛星からも見えると聞いたこともあるが、衛星に乗ったこともないので真偽はわからない。

現存する長城は主に明朝が造営したもの。北方からの侵入の脅威から守るために堅固な壁を築いたという歴史がある。

登り口には「男坂」と「女坂」（写真上）の二つがあった。文字のとおり、男坂は険難の道が多く途中で傾斜 60 度を越える狭くて急坂の“胸付八丁”があるという。当方 76 歳、同行の F 氏は 72 歳。女坂は比較的傾斜が緩いということから、無理をせず我々はこちらから登ることにした。

幅 4 寸ほどの坂道を登っていく。石畳の 30 センチ四方ほどの瓦のような石の真ん中が凹んでいてウォーキングシューズでも歩きにくい。これまで何百（千かもしれない）万の観光客の足で石板がすり減り中心が削られてきたからだだった。両側の高さ 1 寸あまりの塀には幅 1 寸ほどの切り込みがある。北方から攻めてくる敵を攻撃するためだったようだ。

女坂とはいっても城楼の直前の道の傾斜は結構きつい。大部分の登山者が4番城楼まで行って戻ってくるというが、高齢でこの日に限って体調が本調子でない我々には少々きつく3番城楼まで到達し、写真撮影を終わるとそこから引き返した。

下山口（登り口）の休憩所で飲んだ温かな紅茶が身体に心地よかった。手づかみでカップに茶葉を入れたり、値段が高いのには少々不満だったが・・・。

### 世界一の広場・天安門で迷子になっちゃった

帰国してすぐにテレビニュースで天安門広場が何回も映し出された。広場の左側にある人民大会堂では10月18日から第19回共産党大会（全人代）が開催される直前だった。天安門は紫禁城の外城壁南端に位置する正門。壁には縦7メートルの巨大な毛沢東の肖像画がある。



1949年10月1日、毛沢東は天安門の楼閣から中華人民共和国の成立を宣言した。天安門は今に至るも中国の象徴。絵は雨などで汚れてくると描き直されているという。

15日午後2時過ぎ、バスは広場近くで我々を下ろした。徒歩で広場に向かう。大変な人混み。行く先々で警官が見張っている。広場はこれまで政治運動の中心地ともなった。1989年の天安門事件では、多くの学生や市民が政治運動に参加した光景を日本のテレビでもよく見たものだ。



南北880メートル、東西300メートル、総面積44万平方メートルで100万人規模の集会も可能とも言われる世界最大級の広場だ。国の象徴でもある広場は、地方の中国人にとって一度は訪れてみたい場所であり、この日も大勢の観光客で賑わっていた。

全人代を前に広場の一角には巨大な花の飾りが創設されていた。着飾った子供たち。世界からの観光客もカメラやスマホのシャッターを押している。

「許されている区域内であれば撮影は自由です」とガイド。広場のほぼ中央には大きな監視カメラが何台も設置されていた。「不審者や不審な動きが見られたら即座に警備員が出動します」とのことだった。

それにしても広い。筆者はモスクワの「赤の広場」、イタリアの「バチカン前広場」も訪れたことがあるが、天安門の広さはその数倍になるだろう。その広さと人の多さと混雑、そして時間感覚の狂いから、なんとこの大広場で我々二人は迷子になってしまった。

「皆さん、これから個人での見学と写真撮影のためフリーです。30分後にこの場所に集まってください」とガイドの指示。我々は写真撮影に夢中になり、うっかり5分ほど遅れて指定場所に戻った。と、グループ30人の誰もいない。すでに移動してしまっていた。

「さあ困った。言葉もわからないし、地理も全く不案内。この広い場とこの人混みの中ではグループ仲間を探しようもない」。途方に暮れてその近辺を探し回っていると、旗を持ったガイドと仲間の一人と一緒に探しに来てくれた。「ありがとう、助かった！！」。

やっとグループに追いついて、遅れて迷惑をかけたお詫びを言った。と、グループの一人

が笑いながら言った。「さっき、二人組のお爺さんがいないことに気がついて、ガイドさんとグループの代表が探しにいったんですヨ」。

皆に追いつけた大きな安堵感。その一方で小さなショック。みんなの前で「お爺さん」なんて言われたのは初めてだからだ。若いつもりでいたのに周囲の目はやはり正視眼なんだろう。自分の年齢と体力を改めて見直すことになったのも一つの収穫かもしれない。

“あーあ、中国に来てとうとう『お爺ちゃん』になっちゃった！！”

(帰国後、中国語に詳しい友人に話したら「清水さん、気にすることはいいですよ。中国では『お爺さん』という言葉は高齢者を尊敬するのに使われているんですから」と慰められた。でも、言ったのは仲間の日本人・・・なんて気にしない、気にしない！万里の長城に登った若い心意気で行かなくっちゃ！)

### 故宮博物院：壮大なスケールに感嘆と歩き疲れ

天安門をくぐると故宮博物院の建物が延々と続いている(実は、この状態は見学の最後の小山にある建物から実感できるのだが・・・写真右——小山から撮影。スモッグにかすんでいる)。



故宮：かつての名を紫禁城という。明清の歴代皇帝と皇后が暮らしていた。中華帝国のまさに中心。総面積は約 72 万平方メートル。その中に総計で約 15 万平方メートルを占める大小の建物があり、その部屋数は約 9000 とも言われている。

敷地全体は縦長の長方形で、周囲は幅約 52 メートルの濠に囲まれ、高さ約 10 メートルの城壁に守られている。

故宮収蔵の文物は、歴代王朝がその正当性を強調するために収集し連綿と受け継がれた「国の宝」。でもガイドによれば「展示されていた文物は大部分が台湾に持ち去られてしまって今はほとんど残っていません」。国民党の台湾遷移にともない台湾に移送されて台北にも故宮博物院ができることになった背景があるのだ。

日本を発つ前に中国事情に詳しい友人のアドバイスを受けることがあった。そのとき彼女は同趣旨のことを言った。

「残念ですが見るべき文物はあまりないでしょう。でも、建築物の規模と精巧さ、故宮自体のスケールの大きさを見てきてください」

天安門から入って長方形の広大な敷地にある建造物をゆっくりと見学しながら歩くこと 1 時間半あまり。仲間のほとんどは疲れてもうバスに戻りたい気持ちになっていた。でもバスは長方形の敷地の先端の出口に先回りして待っているからとにかく歩ききらなければいけない。「もう何も見なくてもいい。早く出口に行こうよ」なんてブツブツ言いながらも最後には全員が“完走”した。それほどに広大な敷地だったというわけだ。私も「万歩計を持ってきていれば“大記録”が出たかも」なんてふと思ったものだ。

## ぶらドンキーの北京市内見聞と分析

3日間には上記の観光地のほか世界遺産の天壇公園、頤和園また景山公園なども訪れた。「東京のドン・キホーテ」こと「ドンキー」が、ぶらぶら歩きの市内観光や漢方薬店でのレクチャーやショッピングで見聞した何件かを：



◇ 日中の政治関係は難しい状況にありながらも世界中から観光客が訪れている。賑やかで明るいアメリカ人、陽気なスペイン人などとも簡単な挨拶交流ができたし、頤和園では政治情勢が厳しいイランからの15人ほどのグループが湖をバックに記念撮影をしているのにも驚いた。

◇ 緑が美しい景山公園の一角では面白い光景に遭遇した。高齢のお爺さんやお婆さんが孫の写真や履歴をPRする紙を地面に広げている。孫の結婚相手を見つけようとしているのだという。中国の見合い結婚は親が主体になって決めることが多いという。それを祖父母が応援している光景なのだろう。きれいな娘さんの写真を置いた地面にカメラを向けたら「ダメダメ」と拒否されてしまった。

◇ 北京市内の中心部を走る道路は片道6車線。その脇の歩道も広い。近代的な高層ビルが並び周囲には20階建てほどのマンションが林立しているのが際だって目についた。



地方の様子はわからないが、なんといっても日本の25倍の広大な国土。そして土地は国所有がゆえに買収の交渉に、日本のような大変な時間や金、労力を費やさないとすむ。開発のやりやすさが感じられる。

◇ ガイドの説明によると、基本的に工場は8時、公務員は8時30分、外資系企業は9時の始業だという。大部分のサラリーマンは仕事に行く前に自宅での食事はしない。通勤途中で食べていく。1食30円から50円くらい。



◇ 貸し自転車の制度が発達している。サドルの後部にスマホ等で認識できるシールがあり、暗証番号を打ち込むとキーが開けられるようになっている。料金は自動的に付加される。なかなか便利なシステムだと思った。

◇ 一方で中国はなんといっても「食の国」。いろんな料理があり、観光客はそんな多様性を堪能できる。今回、機内食とホテルでの朝食は別として、グループで食べたのは：初日の昼食は飲茶料理、夕食は四川料理、2日目の昼食は広東料理、夕食は北京料理（北京ダック付き）、3日目の昼食はジャージャー麺だった。

## 日中事情をよく知るガイドの面白い案内

北京滞在中のガイドは50代の中国人の壮年。中国の大学で日本語を専攻した後、日本企業で働いていたが、その後ガイドの仕事に入り、中国を訪れる日本人のアテンドと日本に行く中国人の観光案内をしているという。日本語も堪能で両国の文化や国民性を熟知したガイドからは、ユニークでとても面白い話を耳にした。観光バスの中で、世界遺産を巡る最中で、メモった語録のいくつかを：

- まず初日に乗ったバスの中：「皆さん、バスを降りて歩くときは十分に気をつけてくださいよ。ここでは信号は飾り物。車が優先。横断歩道の信号が青でも車が突っ込んでくることがある。左をよく見てミンナデワタレバコワクナイ。勇気が優先です！」
- 「日本人は基本的に他人に迷惑をかけない、周囲に配慮しながら行動している。中国人は自己中心。車の割り込みは日常茶飯事。残念ながら」
- 市内で観光バスが渋滞に入り 10 分経っても進まない。「前方が見えないけど、たぶんVIP が通るんじゃないかな」。3 日後には人民大会堂で 5 年に 1 回の共産党大会が始まろうとしていた。その可能性は十分だろう。(そして、16 日の帰国フライトが滑走路途中まで出たのに 1 時間たっても前に動かない。事情を説明するアナウンスもない。“間違いなく VIP のフライトを待っていたんじゃないかな” と私の推測だった)
- 「昔は『ロシアは中国のお兄さん、中国は北朝鮮のお兄さん』と言われてきた。でも今状況は大きく変わってきた」
- 「国のお金をもらってアメリカに留学し中国に帰ってきている人は 18% のみ。大部分がグリーンカードを取得して向こうに永住してしまう。二世は英語のみで中国語がわからなくなっている」
- 「日本を訪れる中国人は、どこの公衆トイレにも紙がついていてきれいなのにみんな驚く。女性が道の駅でウォッシュレットの付いたトイレに入ると、用を足す前にまずスマホで写真を撮っています」

・・・・・・・・

以上、記してきたのは私が目にし、耳で聞いた内容である。聞き間違いや判断違いもあるかもしれない。たった 3 日間ですべてを知り理解するのは無理である。「群盲象を撫でる」の類いかもしれない。でも一方で「海の水の塩っ辛いを知るのに大海のすべてを飲む必要はない」といった言葉もある。短評をお許しいただきたい。

歴史的にも中国と日本の関係は深かった。



「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」  
(安倍仲磨『古今集』) と遣唐使の時代から今日まで。

現在は政治面で難しく微妙な関係にあり、経済面では競争関係にある。経済は利益があるかないかで交流が盛んになったり衰微したりする。そのなかで文化の交流、人間同士の交流はお互いの理解を深め永続的だ。

創価学会の池田大作先生は「日中友好の金の橋」を築くために半世紀近くにわたって尽力されてきた。100 を超える大学や文化機関から名誉博士や名誉教授の称号を授与され、中国に池田先生についての研究機関もあるのもその証左だろう。

一人の仏教徒として創価学会員として、鳩摩羅什、天台大師など仏教有縁の中国の大地を踏むことができたのも嬉しいことだった。